

水滴とワンプー
ス

J
山
B
作

目が回る光と熱の中、最後の石段に足を伸ばした。

膝に手を付き震える太ももを宥め、焼けた手近な石に腰掛ける。

じつとりと濡れた首元。

不快に張り付いたシャツ。

今にも割れるように喉が痛む。

じつと息を整えていると、ふとパタパタと音がした。

目が痛くなる程のスカートが風に靡く。

空気すら燃えるあやふやな距離でも、ハッキリと現れた。

駆け寄った手水ちようすから湧き出る水を両手ですくい、目を閉じ口許に運ぶ。

薄く淡い唇から白い胸元に走る水滴を見て、思わず目を伏せた。